

稲荷山経塚覚え書

安藤信策

1. はじめに

SF小説や映画の場合と違い、私達は未来へ行ったり、過去へと遡って行ったりすることは出来ない。ただ地中から出土した先人の加工物や住居跡、墓や祭祀の跡などを目の当たりにして過去の人々の生活を想像したり、人々が生きた現場に立ってみることが出来るばかりである。遺跡は過去へのタイムカプセルと言われる所以である。

ところでかつて未来の人々のため、大切な経典を地中に残そうと試みたことがあった。いわばタイムカプセルを製作したわけである。よく知られているように仏教が廃絶する未来のため経典を地中に埋納した経塚遺構がそれである。やがて経塚造営の意図は経典の保存から近親者の追善供養のためへと主眼が変化していったが、仏教が説く善行である作善業の一つとみなされた宗教的なかつ文化的な事業であったことに変わりない。

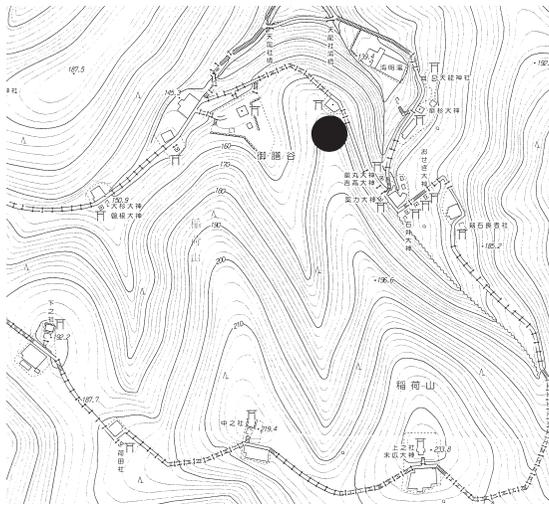
多くの参拝者で連日賑わっている伏見稲荷大社本殿の背後に聳える丘陵頂部には旧社殿のあった一ノ峰、二ノ峰、三ノ峰があり、今も、お塚信仰の霊地として多くの神々が祀られている信仰の場となっている。その一ノ峰からやや西に振れた北側に伸びる尾根の先端に一つの石碑が立っている。表面には「明治四十四年経塚発掘趾」とあり裏面に「昭和四十一年五月吉日建立伏見稲荷大社宮司守屋光春書」と刻まれている。すなわちそこが稲荷山経塚のあった所であり、優れた多くの経塚埋納品が出土した遺構の跡である。

本小論はこの発掘の記録を再検討し、この経塚が持っている歴史的意義を改めて考えてみようとするものである。

2. 稲荷山経塚発見の経緯と報告について

明治44年7月15日、御前谷のある茶店が土砂採取のため稲荷社務所の了解を得て前述の丘陵端部に鍬を入れたところ腐食した刀身片が出土したという。そこで一ヶ月ほど経った8月17日に、稲荷大社の社務所が伏見警察署の立会いのもとで発掘を行ったところ実におびただしい経塚遺物が発見された。

出土品は京都府に届けられ喜田貞吉氏と岩井武俊氏が個別にこれを実見し、岩井氏が翌年4月に考古学雑誌で最初の報告を行っている。また同じ雑誌で高橋健自氏も遺物・遺



第1図 稲荷山経塚位置図
(京都市都市計画図1/2500を縮小)

構の検討を行った。^(注2) 上述の宮司守屋氏は昭和41年12月『稲荷山経塚』を刊行し岩井氏、高橋氏の論文を収録すると共に、佐野大和氏の論考を載^(注3)せ、また稲荷山に関する諸論文を掲載した。出土品は現在、東京国立博物館に収蔵され、優れた経塚遺品として折にふれ公開がなされている。そして博物館の三宅敏之氏はこの経塚は関白九条兼実が、腹違いの姉である崇徳天皇中宮・皇嘉門院聖子の菩提を弔うために造営したものであろうとする説を提唱した。^(注4)

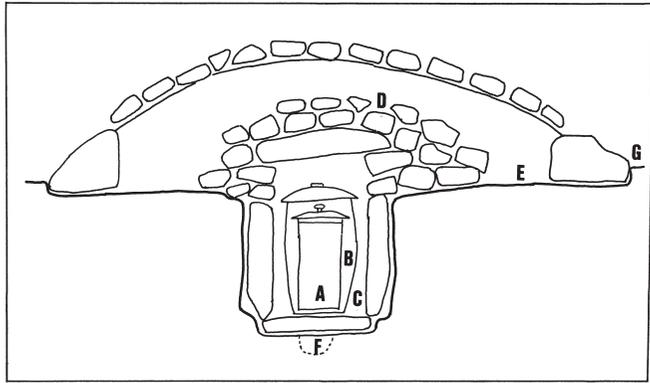
稲荷山経塚の遺構の状況は岩井氏も高橋氏も聞き取り調査であるため少し異なるところがある。そこで両氏の報告するところを再録して、その違いについて考慮してみたい。まず岩井氏の記述である。

「余輩不幸にしてその発掘の当時に居合さざりし為めにその状況を精しくするを得ざれども、当時発掘に立会し稲荷社所員及前記井上亭主人の談並に伏見警察署が府庁に致せる進達書等により彼此綜合して此の間の消息を述べんに、先ず古刀身を発見してより地下二三尺掘り下げしに小石を以て積み上げたる石畳に相遇し、その石畳の四壁を壊したるに更に自然石の板石を以て幅一尺、長二尺程の僅に土製経筒二個納るに足る程度の石室を設け、更に同状の板石を以て蓋石となしありしといふ。其の二個の土製経筒を開きしに一方には白銅製経筒を納め、更に白銅製経筒の内部には前記の如く、軸木一六本、銀製合子、砂金、金葉、銀棒、古銭等を納めあり、その一の土製経筒には何物をも存せず内部に僅かに土砂の入りありしを認めたりと、其の他の多くの遺物は、その板石の石室と石畳との間に埋没しありたりといふ。今一個の土製経筒内に何物をも存せず只僅かに土砂の入り在りし事実は甚だ怪慚に堪えざる所にして、埋没当初よりなりとするならば何物をも納しめばさらに埋没すべき必要なかるべく、さりとて、蓋石の動ける形跡なくその他の遺物の埋没存在の状態よりかつて見ても且て発掘せられて一方の筒の分のみを取り去りたりとも亦想像し兼ね所にして、他にかかる類例の在りあらば江湖の報告を希望する次第なり。」

また一方、高橋氏が報告するところは次のとおりである。

「経塚の位置は南方高く北方低き傾斜面にして、面積七尺四方、深さ四尺程のところを、

山より切出したるばかりの岩石にて充し、中心部に於て東西に並べて陶製経筒を安置し、その周囲二尺四方許は別に岩石を積みたるものの如し。而して東方の陶筒は蓋稍離れて一方に傾き、内部には何らの遺物なく、赤土充滿し、西方の陶筒は内



第2図 経塚模式図(『経塚遺宝』による)

に銀銅経筒を納め、その内より砂金を容れたる銀製合子、銀塊、延金、玉類、古銭、及び経巻軸を発見せり。金銅華瓶と金銅簪とは北方の内壁に近きところより、鏡と短刀と白磁合子とは積石中所々より発見したり。中にも唐草尾長鳥鏡一面と短刀三振とは積石の表面に近きところより最初に於て発見したりという。以上は発掘当時之を監視せられたる稲荷神社主典遠藤氏及び警官等より聞得たるところなり。埋没の状態かくの如く混乱を表せるは経塚の構造既に過去に於て旧状を失いしを察するに足るべく、想うに一たび発掘せられしことありしなるべし。経塚の位置の朝日さし夕日かがやくところのみに限らざること別稿和田氏の文の如し。」

経塚には経筒の周囲を小石室で囲む有槨式と石室を持たない無槨式とがあるが、本例は有槨式である。有槨式の例として稲垣晋也氏が紹介する朝熊山経塚の例によって考えてみる(第2図)。すると「板石を以て幅一尺、長二尺程の僅に土製経筒二個納るに足る程度^(註5)の石室を設け」という岩井氏の報告が遺構の実状に合っていると思われる。稲垣氏も『経塚遺宝』の稲荷山経塚の項においてそのように記述している。

西側の陶製経筒及びその中に入った白銅製経筒と入れられていた遺物については両者は変わらないが、その他の出土品の位置については高橋氏が精しく記録している。稲垣氏が例示した朝熊山経塚でのA~Dにあたる位置関係を考えることが出来よう。ただ地山面を掘り込んで石室が作られたかは不明であり、おそらく余り深い掘り込みでなく底石も無かったかと思われる。豊富でかつ貴重な品々が保たれて出土しているから、岩井氏の言うように未発掘の遺跡であったであろう。未発掘として東の陶製外筒の中が空であった点を考慮する必要がある。

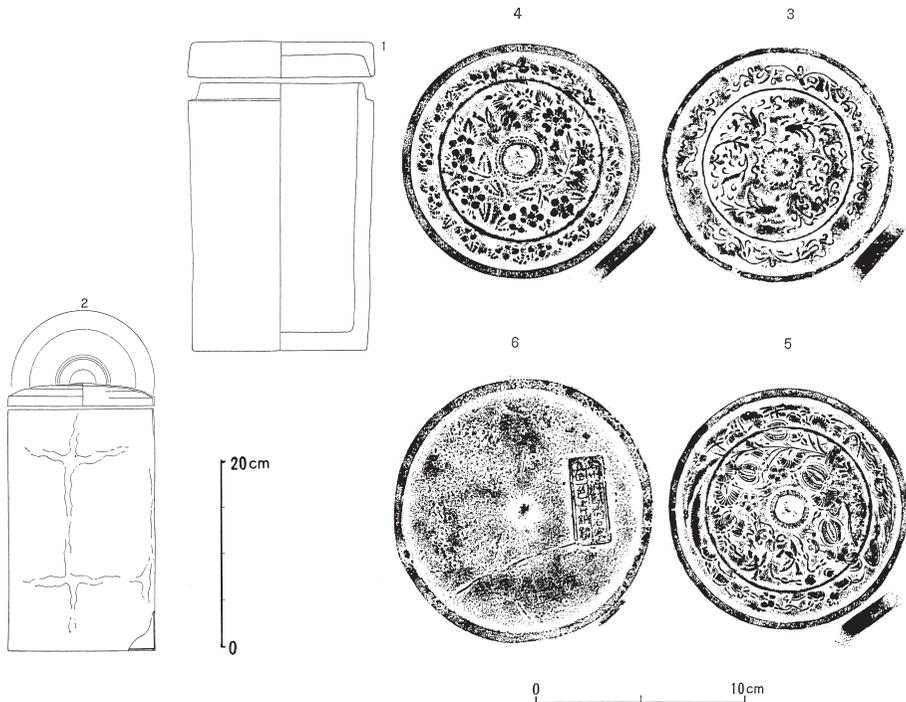
そして当時の遺構の状況は石室を被う被覆石積とその周囲の封土が残っていたもので、封土の周囲の垣石と上部の葺き石あるいは敷石などは失われていたと推定される。後述す

るようにこの経塚は九条兼実が造営した可能性が非常に高く、その日記『玉葉』によって造営の経過がよく分かるのである。『玉葉』の記述では経塚の上部には石塔を立て法性寺座主が梵字を書いたとされている。その石塔もすでに失われていたのである。

3. 豊富な出土品について

これらの豊富な出土品の内容を佐野大和氏は『稲荷山経塚』中の論考の中で二十三種に分類して紹介している^(注6)。佐野氏と記述と前述の稲垣氏との記述を参照しつつ主な遺物についてその特色を考えてみたい。なお両氏の名称が異なる場合は十年ほど後代に刊行された見解を尊重し、稲垣氏の名称によっている。

一. 陶製外筒2口(ただし1口は破損していた)、二. 銅鑄製経筒1口、三. 鏡鑑類4面、(一)唐草鳳凰鏡、(二)桜山吹双鳥鏡、(三)甜瓜双鳥鏡、(四)湖州鏡、四. 青白磁合子4口(1口だけ蓋不明)、五. 白磁皿1点、六. 白磁小盃1点、七. 銀製鍍金菊折枝文合子1口、八. 銅製小鏡1点、九. 銅製皿1点、十. 錫製碟子1点、十一. 金銅花瓶2口、十二. 銀製提子1点、十三. 銅製簪1点、十四. 刀身断片一括、十五. 不明鉄器(鉄鏡残決か)1点、十六. 玉類、(一)ガラス玉37個、(二)水晶数珠玉1点、(三)錫製丸玉2個、十七. 飾金具(一)



第3図 稲荷山経塚出土品(『稲荷山経塚』による 1：外筒、2：経筒、3～6：鏡)

金銅3個、(二)錫製4個、(三)金銅残欠2個、一八. 延金5枚、十九. 砂金1包(元は3包)、二十. 銀塊一個、二十一. 銭貨10枚、二十二. 経巻軸10本、二十三. 紙片その他。

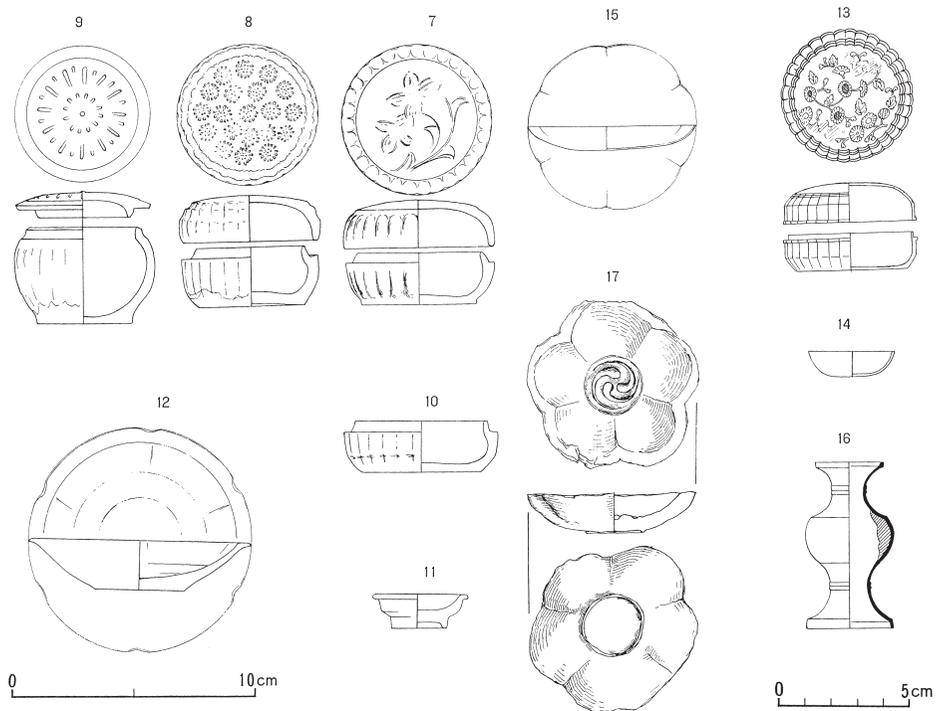
なお紙片その他の項目は稲垣氏には無い。刀身断片一括について高橋氏は、刀子14振り他断片として報告している。なお十二の銀製提子を三宅俊之氏は齒黒用のものとされている^(注7)。また献燈用の油入れとする説もある。

稲垣氏は青白磁合子は全て中国宋代のものとされている。銀製合子は日本製。青白磁合子と同形に造り表面を鍍金している。発掘当時には中に砂金3包が入っていたものである。

湖州鏡の銘は「湖州儀鳳橋石家真正一色青銅鏡」である。銭貨は唐の開元通宝1、北宋の淳化元宝・熙寧元宝・元豊通宝各1、天祐通宝3、聖宋元宝1、政和通宝2の10枚である。

これらの品々の納入については、銅製経筒の中に10巻の経典と砂金の入った銀製合子及び銀塊、延金、玉類、銭貨を入れ、これを封じて陶製外筒の中に入れ、石室西側に置いている。また華瓶2口と簪は石室の北側に置いた。石室の蓋をした後、その上に石を積んでいき、積み石の空所に鏡、短刀、合子などを納めたと推定されている。

またこれらの多様な品々は経筒を封じた後、十種供養をしたと記述していることに対応



第4図 稲荷山経塚出土品(『稲荷山経塚』による
7～10: 青白磁、11・12: 白磁、13: 銀製、14・15: 銅製、16: 金銅、17: 錫製楝子)

していると佐野氏は指摘している。十種供養とは、仏法僧の三宝や亡くなった人の霊に十種の捧げ物をする仏教儀礼である。十種は1. 華、2. 香、3. 瓔珞、4. 抹香、5. 塗香、6. 焼香、7. 絵蓋幢幡、8. 衣服、9. 伎楽、10. 合掌であるという。灯明を捧げることも後のほうで供養八燈として出てくる。

『玉葉』によれば捧げ物の一部は持ち帰って不参加の人たちや僧都に贈っているから全てを経塚に入れたのではないようであるが、多くは仏への納入品となったであろう。佐野氏は華供養の華瓶、香を入れた合子などの容器類、玉や金属の装飾・荘厳具類などを十種供養に用いた納入品と指摘しているが妥当な見解であろう。

また破損していて土が入り、何も見出せなかった東側の陶製外筒1口は空のまま埋められたのだろうか。推定の域を出ないけれども、『玉葉』の「先奉書終之後余書願文并名帳、奉入筒了」に対応して、あるいは願文と名帳とを入れたのではないかと考えられよう。

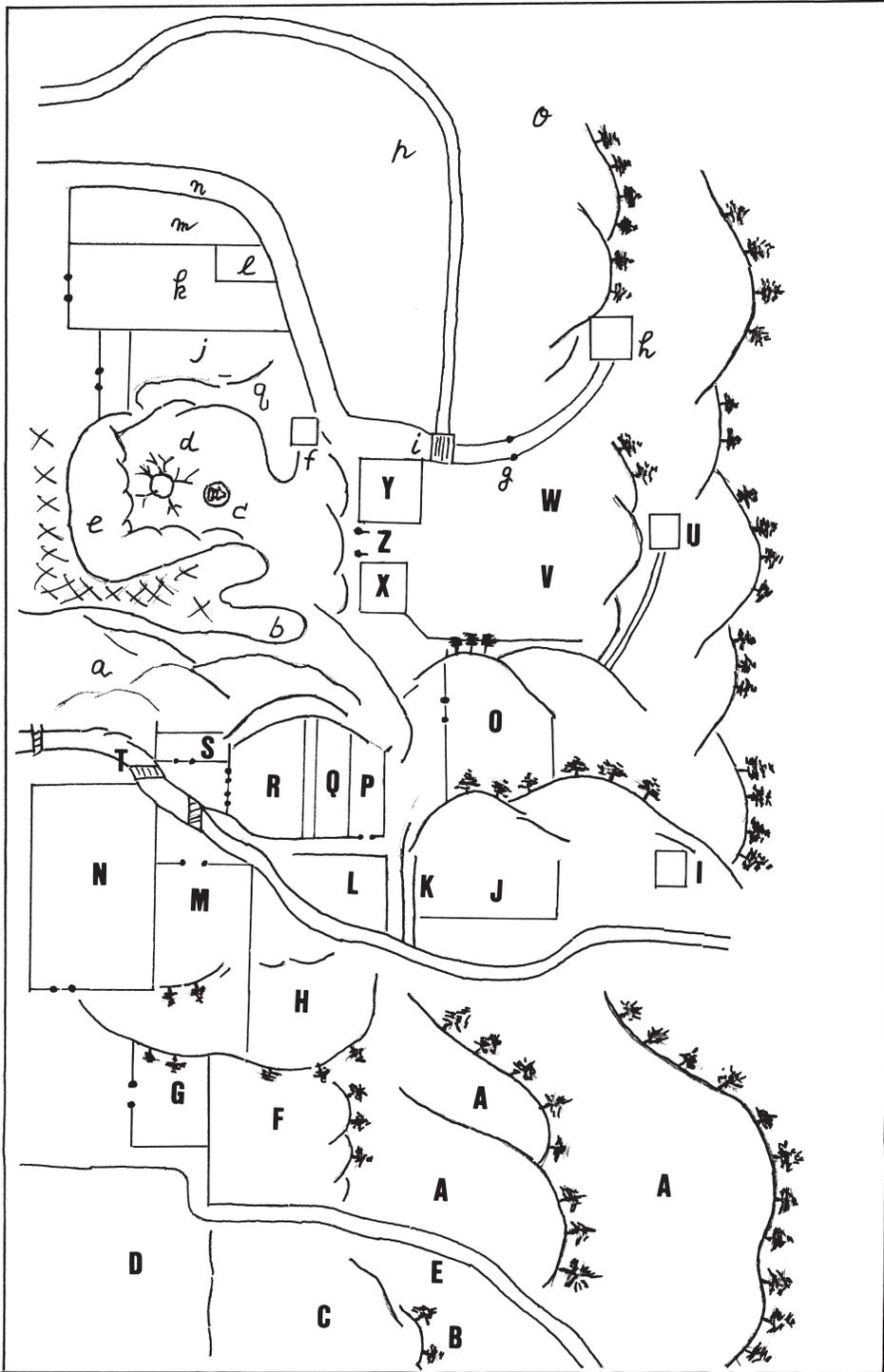
4. 経塚の造営者

このように多彩で高級な品々の出土は各地の経塚と比較しても類例がないほどである。したがってこれを造営したのは高位の貴族階級に属する者と推定される。その候補として藤原氏が挙げられており、三宅敏之氏は九条兼実(1149~1207)を有力な候補とされた。

すなわち兼実の日記『玉葉』の養和2年(1182)4月16日の項に「十六日(丙辰)陰晴不定、此日、如法経終写功、奉埋最勝金剛院山、(故女院御墓所近辺也)」(括弧内は割注を表す。以下も同じ)と記されているのが稲荷山経塚の位置やその内容によく適合していることを指摘している。

『玉葉』の養和2年の3月から4月にかけて、その前年に崩御された兼実の姉にあたる崇徳天皇中宮・皇嘉門院聖子の菩提を弔うために経塚を造営した記録がある。経典を埋納するまでのさまざまな儀式や行程が詳細に記録されていて、経塚造営がどのように行われたかを知ることの出来る貴重な記録となっている。たとえば『玉葉』には埋納に際して経典等を筒に入れた後「書手各封を付す」と記されているが、この経筒には蓋から身にかけて縦に1筋、横に2段、十文字に紐で結わえた跡が残っていて記録と一致している(第3図の経筒参照)。また経塚を営んだ場所は門院の墓所の近辺の最勝金剛院山であった。墓所の最勝金剛院は『法性寺御領山指図』の中で東福寺の北側にあり、稲荷山は約1キロメートルほどであるから近辺としても許容される範囲に位置していると考えられる。

『法性寺御領山指図』は泰任法眼注進之正安元年正月三十日の割注を有する図で、正安元年(1299)当時の法性寺ゆかりの社寺や道の状況を知りうる貴重な資料である。図中には多くの書き込みがあり歴史的環境復元の手掛かりとなっている。第5図の模写の記号はそ



第5図 法性寺御領山指図-上を北とする 模写-（『日本荘園絵図集成』(上)による）

の書き込みである。西岡虎之助編『日本荘園絵図集成(上)』1976年によっている。なお図中で他の写本により一部改変した箇所がある。

A. 稲荷山、B. 稲荷山城内、C. 天龍寺小山、D. 東福寺菜園、E. 号環坂、F. 天龍寺、G. 成就院、H. 号内山、I. 峯殿、J. 僧坊并在家等、K. 小松谷池流、L. 定法寺、M. 最勝金剛院、N. 東福寺、O. 小松谷、P. 藻壁門院法華堂、Q. 定法寺殿赤堂、R. 月輪殿、S. 堂頭、T. 橋、U. 好明寺、V. 泉涌寺、W. 来迎院、X. 西峯、Y. 西北峯、Z. 泉涌寺大門、a. 普門院、b. 号羅刹谷、c. 法性寺殿御墓、d. 貞信公御墓、e. 観音給地、f. 大仏、g. 鳥居、h. 観音寺、i. 橋、j. 法菩提寺、k. 東林寺、l. 円通寺領、m. 在家等、n. 号観音寺大路、o. 円通寺、p. 円通寺領長築地内、q. 号極楽谷、

この図の研究を行った西田直二郎氏は最勝金剛院について、「最勝金剛院の造立は、忠通の時にあり、而して忠通のこの院の造立は、其の家の尊信特に深くし、法性寺の新堂と言はんよりは、寧ろ法性寺を代表するものたる感あるに至りしまた、法性寺興廢の上には重要なる意義をなす寺院なり」としている^(注8)。また法性寺の位置について考察した福山敏男氏は、『玉葉』の記録から最勝金剛院は広大な敷地を占めていたことを指摘している^(注9)。皇嘉門院聖子の葬送の際には、最勝金剛院の西面の北の四足門から御車を入れ、同院の御所と御堂の前(南)を通り、同院の東南の山中に埋葬し、随行した兼実も同院の西面の八足門から出たとのことである。また福山氏は『法性寺御領山指図』の最勝金剛院の位置や規模については東福寺の造営に伴って改変されている可能性への注意を示唆しているが、規模は縮小されているとしても、おおよその位置はこの図によって推定できると思われる。

『玉葉』に記される如法經埋納の儀式や行程をここで辿ってみたい。

写經に先立ってまず如法懺法がおこなわれていた。これは前方便の懺法7日間、正修21日間に及ぶ長期のものである。三月十五日の項には「十五日(乙酉)天晴、沐浴、入夜參宿御堂御所、自今日初夜時、可始如法懺法(其間如法可誦誦法花經也)前、方便懺法之故也」と記されている。そして十五日から二十二日までこれが続き、三月二十三日から四月十三日まで正修の懺法が続けられた。四月八日には写經の料紙を搬入する儀式があった。十一日には写經に使う靈水が運ばれた。如法転誦が十三日に終わると翌十四日から写經が始められる。写經は十四日暁方から始められて十六日に終わり、その日に埋納されたのである。

十四日、(甲寅)天晴自今曉奉書始如法經、懺法之後有啓白(僧都被勤之)後御筆立也子細在別次第

十六日、(丙辰)陰晴不定、此日、如法經終写功、奉埋最勝金剛院山、(故女院御墓所近辺也)先奉書終之後、余書願文并名帳奉入筒了、入筒之後、書手各付封、其後

補闕分、(経円阿闍梨勤之)次十種供養、(日来道場、依無便宜、奉渡御経於御堂)導師智詮阿闍梨也、十種両方儲之、其外供養八燈、其後奉渡法性寺、聖人四人之外、有仮聖人等、御経奉出之後、余、大将、僧都同車向法性寺、自他道参会他、自御所門内步行、輿傍奉埋之後、以石(兼運置之)築垣、其上立石五輪塔、(法性寺座主被書梵字也)其後於御墓所読阿弥陀経了、帰参御堂之後帰宅、今日十種供養、有小捧物、道場荒涼之人不可入、仍只自後戸迎送宿所也、余帰宅後、又以別捧物、送僧都之許、日来、此行之間、殊被入力之故也、

如法写経の後、十種供養等の丁重な儀式を経て、清められた經典は埋納されたのであるが、その主たる意図は何であったろうか。三宅氏は帰路に姉の墓参をし、阿弥陀経を読誦していることから皇嘉門院聖子の菩提を弔うことが主眼だったとされる。一方、佐野氏は如法懺法が始められた三月十五日の項の条下に「其所求之意趣、広為利群生也、殊又為直天下之乱、又為消戰場終命之輩怨霊也、其外廻向、可任各々意趣云々」とあることを指摘して、もっと広く功德が及ぶことを願ったとしている。佐野氏が述べたように、皇嘉門院聖子の菩提を弔うことと共に、戦場に命を散らした多くの怨霊を慰めることも兼実の大事な目的であったと考えてよいのではあるまいか。

5. 如法写経について

『玉葉』には兼実が如法写経を行った記事が多く出てくる。たとえばほとんど毎月朔日には般若心経の書写をしており、年に一度、12巻をまとめて氏神の春日大社に奉納している。これは佐野氏が指摘するように氏長者としての立場からの作善であると共に、兼実の信仰心を表すものでもあろう。

稲垣晋也氏は前述の「経塚の遺跡と構造」の中で地中に埋める時の奉納作法について紹介している。『如法経現修作法』によると「行列、石壇場に到着、(石壇と穴は前もって用意する)穴に灑水・散香、経筒を土筒に入れる、土筒の蓋をする、穴に蓋石をする、石壇を築く(異説・畳石覆土)、石塔を安置(『玉葉』にもある)、正面で合殺、行道・後唄・伽陀、退出となっている。なお括弧内は稲垣氏の注記。

『玉葉』での数多い如法写経の記録の中で埋経を行ったと推定される次の4例が目される。

「安元三年(1177)正月十四日、依為吉日請智詮(阿)闍梨初護身(女房小兒同之)去年十二月二十六日参詣熊野余所書之金泥心経三卷、三御山各一卷奉纏(埋)之云々」

「養和二年四月十六日 - 前述」

「寿永元年(1182)九月十四日、(前略)抑件経三箇年之間植紙麻、観性法橋懺法、法印為

願立所被書写也、自写經之所到堂場、云々如法經六部箇上以木筆石墨奉書銘(太神宮、八幡、賀茂、日吉、天王寺、)件六所々願成就之後可奉埋也、(後略)」

「元暦二年(1185)八月二十三日、無動寺法印相具如法經被參笠置寺、為先師法親王書写如法經、為奉瘞彼靈屈也、又書写黃紙同清浄經二部(一部奉為先妣余漉反古色紙送之一部近年合戦之間死亡候輩奉始先帝至干大宮十為出離也)」

最後の例は笠置寺の靈窟に埋納したものであるが、一部は亡くなった先妣(せんび、亡くなった母)の為に反古の色紙を自ら漉いた紙での写經であり、一部は近年の合戦で亡くなった先帝(安徳天皇か)を始めとする人々の為であるとする。保元・平治の乱に始まり、源平の戦乱を経るという時代の荒波を越え、時代の変転を見つめて来た九条兼実の心情が伝わってくる記録である。また清浄な經典として埋納する為には法印や法橋といった高位の僧侶による懺法が必要とされたことも見逃せない。

如法經についてはすでに早く三宅敏之氏が、先行研究を踏まえながら詳細に論考しておられる。^(註10)三宅氏によれば、慈覚大師円仁(794~864)が天長年間に横川に籠もり、法華懺法を読み四種三昧を修して法華經を書写しその後、十種供養を行ったのが、如法經確立の基礎となったのである。特に円仁は天長10年(833)に身体に異状を覚え以後3年間横川に籠山して厳格な規則による法華經書写を実践したということである。^(註11)円仁の如法經は小塔に納めて堂中に安置されていたが、長元4年(1031)に至って覚超ら一山僉議の上、56億7千万年後の弥勒下生の時まで円仁の如法經を地下に埋納しておこうと計画され上東門院藤原彰子の援助を得て經筒が作成され、降って40年後の承安年間に埋納されたようである。こうしてその後も横川には多くの經塚が造営されることとなった。三宅氏は如法經が作善業として広まり、11世紀後半から12世紀全般に見られる經塚盛行の重要な要因となったと述べている。長元4年以前の埋經について三宅氏は、末法思想との関わりを指摘される。そして埋經開始の時期を10世紀の末葉に求めることが妥当とされた。

近年、經塚の造営は中国・宋との文物の交流の中で宋の影響によって始まったことを指摘する研究者が多くなった。そうした研究者の一人である谷口耕生氏は、呉越、北宋の仏舎利塔納入品と經塚出土品は仏舎利、經典、仏像、鏡像など極めて近似した内容を持っていることを指摘し、何より両者を結びつける象徴的な存在が金峯山經塚や那智經塚から出土する銅製の錢弘俶塔であるとした。「經塚が阿育王寺の仏舎利信仰を中心に据えた呉越仏教、さらにはそれを引き継ぐ北宋仏教を導入することで生まれた仏教作善の姿だったといえるだろう。」と述べている。そして宋人が多くいた博多を中心とした北部九州に平安時代の經塚が集中的に造営された事実を見つめ直すべきではないかとされている。^(註12)

6. 如法写経—雲龍院の場合

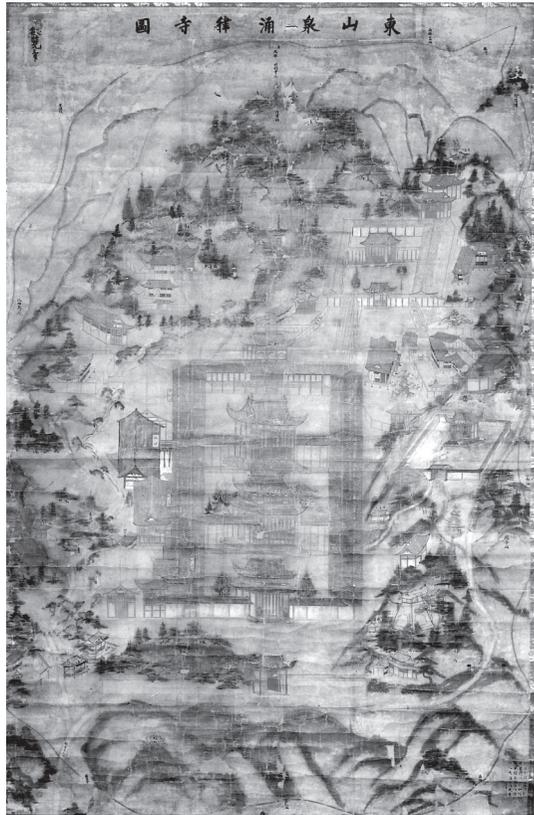
如法写経は鎌倉時代以後も重んじられ、上層社会で行われていたことは、南北朝時代のことではあるが、最勝金剛院にも程近い泉涌寺塔頭の雲龍院の事例で示すことができる。雲龍院の場合、その始めは「逆修」の為の如法写経であったが、如法写経の功德は戦乱の時代の中での一つの灯明として受け継がれていったと思われる。

泉涌寺は建保6年(1218)、開山の月輪大師俊苳律師が豊前の地頭・宇都宮信房から仙遊寺の寺地の寄進を受け、十二年の歳月をかけて、勉学に努めた中国・宋の法式を取り入れた大伽藍の造営を志し、皇室はじめ多くの帰依を得て嘉禄2年(1226)に主要伽藍の完成をみた寺である。俊苳律師にとっては宋風の本格的伽藍の創建、つまり形を整えること、そして戒律の復興と堅持に見られる心を誡め正すことは一体であったことを、『造泉涌寺勸進疏』の内容から積達雄氏は指摘している。^(注13)

また伽藍の創建にあたって九条兼実の孫である九条道家が律師に帰依し、多くの援助を行ったことも注目される。

創建当初の伽藍配置は南北朝時代に描かれたと推定される「東山泉涌律寺図」によって知られる。それによると今と同位置の大門(東山門)を入れて坂を下った所に主要伽藍が東西に直線的に並んで回廊で囲まれ、回廊の北に接して方丈や東司があり、現在御陵がある山裾にまで堂舎が建ち並んでいる。回廊で囲まれた主要伽藍は西から三門、法雨堂(法堂)、三尊殿(仏殿)、善本院(舍利殿)となっている。法堂が仏殿の前にあるのは泉涌寺の特色である。なお善本院に祀られる仏牙舍利は俊苳律師の弟子・堪海によって1228年に将来されたことを近年、西谷功氏が明らかにした。^(注14)

中心伽藍を一直線に並べて回廊で囲い、その両側に僧堂や庫裏を建てているのは宋様式を取り入れたもの



第6図 東山泉涌律寺図

であり、禅宗寺院にも見られるものである。法雨堂と善本院は二階建てである。法雨堂は嘉禄元年(1225)に完成した重閣講堂に当たるものであり、その翌年には主要伽藍が落成したのであった。中心伽藍建築の軒先の強い反り上がり、善本院に見られる火灯窓、法雨堂と三尊殿の棟両端の鴟尾赤色の彩色などが宋様式を示しており、周辺には日本的な建物が見られ俊祐のめざしたものと異なる部分があるものの、日本で宋風の伽藍が整っていたことを示しており、宋様式の日本への伝播を考えるうえで、きわめて重要であることを箱崎和久氏が指摘している^(注15)。

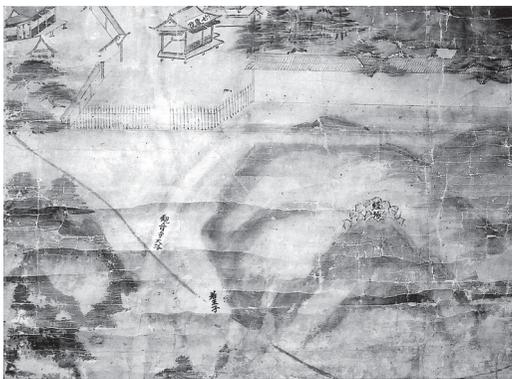
一番奥の開山堂のすぐ西に我が国最初の十六観院(観無量寿經に説く十六観を三年の間、堂舎に籠って修行実践する院)が営まれているのも開山律師の構想が弟子達によって実現したことを示している(第6図参照。なお「東山泉涌律寺図」の写真は宗教法人・泉涌寺に提供していただいた)。この泉涌寺最古の伽藍配置をしめす「東山泉涌律寺図」が描かれた年代の推定には雲龍院の創建年代が手掛かりとなっているのである。

すなわち図の左側中央で築地の囲まれた堂宇が雲龍院であり、その後ろのお堂は如法写經の道場・龍華院である。寺伝によれば雲龍院は泉涌寺の第21世長老の竹巖聖皐長老に北朝2代の後光厳天皇が帰依され、後光厳天皇を本願とし竹巖聖皐長老を開山として応安5年(1372)に創建された。また後光厳天皇の皇子・後円融天皇も聖皐長老に帰依され、特に後円融天皇は如法写經を發願され、聖皐長老を開基として如法写經会をその最も重要な行事とする龍華院が康応元年(1389)に創建されたのである。

さて図をよく観察すると雲龍院の堂宇の部分はその下に別の堂宇が描かれていたものが消されて、その上に描かれていることが判明する。したがってこの図が描かれた年代は龍華院が創建された康応元年(1389)よりは古く、また泉涌寺の最初の天皇の御陵である四条天皇の御陵・新御堂が描かれているから、それが建てられた仁治3年(1242)よりは新しい

ことが分かるのである。

後円融天皇が發願された如法写經はその後、雲龍院の堂宇が応仁の戦乱などの災禍をこうむって変転する中でもその都度、堂宇とともに写經の行事も復興され、受け継がれて今日に至っている。現在、京都国立博物館に寄託されている後円融天皇の宸翰には如法写經に込められた信仰の一端が窺われる。この場合は「逆修」という儀礼に始まっ



第7図 経塚(中央やや右寄りの山上)

てはいるが、今日に継承される中で經典書写の功德が多くの人に広まったと言えよう。天皇の綸旨の内容を紹介しておきたい。

如法写経者其功德甚深也、顯当善根何事豈如之乎、朕至三十有余歳、雖無指惡罪、亦不修殊善事、恐当来受苦万却輪転、故命聖臯上人、於龍華院、毎年不闕始置彼写経之勤行、為朕逆修、万世敢勿令退転、没后者必以忌日可当修中祈菩提者也、以播州伊川庄既定件料所畢、此一村代々相伝地也、誰人妨之、堅守此旨矣、康応元年十月 日

なお「東山泉涌律寺図」の右下には連なる山々が描かれ、泉涌寺伽藍を中心としたこの地は一つの仙境であり、聖なる空間であることが示されている。そして雲龍院と龍華院の間には経塚があることが分かる。また右側下の小山の山頂にも経塚が存在している。これらは如法写経によって営まれた経塚ではないかと考えられる。



第8図 築地内の雲龍院と後の龍華院の間の経塚

7. おわりにー稲荷山経塚の意義

以上のように稲荷山経塚によって知られることは多い。経塚の意味するところは時代や地域や、造営者個人によってもいろいろであろうことを示唆する経塚遺跡でもある。これまで述べたことを改めてまとめておきたい。

(1)稲荷山経塚は造営者がほぼ特定される事例として大きな意味を持っている。

(2)その造営者が藤原兼実という当時一流の貴族であり、造営の過程や意図を記録に残してくれていることも、遺跡・遺物とその記録が一致している事例として貴重である。

(3)経塚は末法思想のもとで經典を遠い将来に保存する意図で造営が始められたと想定されるが、しだいにその意図は近親者の極楽往生を願い、また一族の繁栄を願うため功德を積む作善の営みとなり、あるいは国の平安を祈る作善の儀礼となったことが窺われる。稲荷山経塚も姉の菩提を弔い、極楽往生を願うと共に、戦乱で亡くなった人々の魂の平安を祈るという、九条兼実のさまざまな祈りが込められていたと推定されるのである。

(4)鎌倉時代以降の経塚が如法写経により、その作善業の仕上げとして造営された可能性が多いことを示している遺跡でもある。如法写経は在家信者が行うことの出来る作善業としてその後も広く行われたものと思われる。

(5) 稲荷山経塚は聖地、霊場とされた場所に経塚が営まれる一例でもある。金峰山や京都市の鞍馬山、京都府宮津市の籠神社奥宮・真名井神社にある経塚の例のように聖地、霊場とされた場所に経塚が営まれた。特に丹後の真名井神社には磐座があり稲荷山と信仰的環境が似ていることも考慮されよう。稲荷山経塚は稲荷山に対する人々の信仰を如実に物語っている遺跡でもある。

鎌倉時代以降は経塚の造営の目的が追善供養となる傾向があることは各地の経塚に残された銘文によって判明する。籠神社境内出土の重要文化財・文治4年銘の2点の経筒もその一例である。その一つには「右為尼向妙現世安穩後世菩提也」とあり、また他の一つには「右為沙弥西念尊靈往生極楽□」とあって、いずれも近親者の極楽往生が願われているのである。

稲荷山経塚に近親者の菩提を弔いその極楽往生を願うという造営の意図があったことは、各地の墓地で見出される経塚の意味を解く鍵ともなると考えられる。杉原和雄氏は丹後の経塚についてまとめた論考の中で墓地の中の経塚について紹介し、経塚の複合遺跡としての性格を指摘された^(註16)。墓地の中の経塚が如法写経という作善行為をとまっていたかどうかは不明であるが、経塚の造営の功德が近親者の菩提を弔い、その極楽往生に役立てようという願いは造営者の主たる目的となっていたのではないだろうか。

(あんどう・しんさく = 泉涌寺心照殿学芸主任)

- 注1 岩井武俊「山城稲荷山経塚発掘遺物の研究」(『考古学雑誌』第2巻8号)1912年
注2 高橋健自「山城稲荷山経塚及発掘遺物に就きて」(『考古学雑誌』第2巻8号)1912年
注3 佐野大和「山城稲荷山の経塚について」(『稲荷山経塚』伏見稲荷大社社務所)1966年
注4 三宅敏之「稲荷山の経塚」(『朱』第10号 伏見稲荷大社社務所)1970年
注5 稲垣晋也「経塚の遺跡と構造」(『経塚遺宝』東京国立博物館)1977年
注6 注3に同じ
注7 三宅敏之「経塚の遺物」(『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣出版)1984年
注8 西田直二郎『京都史蹟の研究』吉川弘文館)1961年
注9 福山敏男「法性寺の位置について」(『仏教芸術』第100号)1975年
注10 三宅敏之「経塚」(『日本の考古学』Ⅶ 河出書房新社)1967年
注11 政次浩「コラム如法経」(有賀祥隆他『慈覚大師円仁とその名宝』)2007年
注12 谷口耕生「聖地寧波をめぐる信仰と美術」(『特別展聖地寧波 - 日本仏教1300年の源流』奈良国立博物館)2009年
注13 釋龍雄「開山俊?律師の理念」(『戒律文化』第7号)2009年
注14 西谷功「泉涌寺創建と仏牙舍利」(『戒律文化』第7号)2009年
注15 箱崎和久「泉涌寺伽藍にみる南宋建築文化」(『日本と宋元の邂逅』アジア遊学122)2009年
注16 杉原和雄「経塚遺構と古墓 - 京都府北部を中心として -」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987年